

## 看護学生の卒業研究論文の実態調査

－ 6－10期生の研究内容分析 －

(看護学生／卒業研究／研究分野)

津本優子\*・佐藤美紀子\*\*・竹田裕子\*・井上和子\*\*・吉野拓未\*\*・小林裕太\*

## Analysis of Graduation Theses of Nursing Students － Analysis of Content during the six to tenth period －

(nursing students / graduation research / research category)

Yuko TSUMOTO, Mikiko SATO, Yuko TAKEDA, Kazuko INOUE,  
Takumi YOSHINO and Yutaka KOBAYASHI

**Summary** Graduation research is important for each student as a final step to cultivate problem solving skills. In order to achieve better quality of training courses, cross-sectional analysis of the papers of the finished courses may give useful information on future improvement. We compared graduation works in the next five-years to in the first five-years. The collected 339 papers were analyzed in terms of each research category and each period by using the following items: research field of supervisors, design, sampling, objects and their number, methods, existence of figures and tables, arrangement of figures and tables, consideration of ethical issues, and the results of morphological analysis of subjects.

The result shows that the number of research field increased, compared with the first to fifth period. Since supervisors still place priorities on students' interests even the subjects are out of their expertise, opening the course of school nursing teacher and support of assistant professors are thought to be the major factors of the enlargement of the field. Although the papers were better prepared than those during the first to fifth period when some papers lack some description especially in methods, inappropriate usage of figures and tables were observed in some papers, which shows that pertinent advice were necessary for preparation of graduation thesis.

【要約】問題解決能力育成の集大成として行っている卒業研究の取り組みについて、本学卒業生6-10期の研究内容を明らかにし、1-5期の結果と比較することで今後の教育の検討資料とする目的で分析を行った。第6-10期の看護学科卒業研究論文339件について、研究分野、指導教員の研究分野、研究デザイン・サンプリング・対象と数・分析方法・図表の有無と記載場所・倫理的配慮の記述の有無およびテーマの形態素解析の結果についてカテゴリ別・期別の分析を行った。

その結果、学生の研究分野は1-5期に比べて増えており、教員が学生の興味を優先させて専門以外の分野を指導する姿勢は変わっておらず、分野拡大には養護教諭養成課程の開始や助教の指導サポートの影響が考えられた。1-5期でみられた論文中の研究方法などの記載が不備な点は減っていたが、一部で図表の不適切な使い方がみられ、論文の質を高める指導は引き続き必要である。

\*島根大学医学部基礎看護学講座

Department of Fundamental Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

\*\*島根大学医学部成人看護学講座

Department of Clinical Nursing, Shimane University Faculty of Medicine

### I. はじめに

看護を学問として学ぶ限り研究的態度を養うことは必須であり、看護教育においても科目として設けられ、各大学で卒業研究指導に取り組んでいる。本学科では、「看護実践の根拠となる知識・理論を追求する科学的思

考力を養い、看護を探究していく研究への姿勢や創造性を主体的な取り組みで育成する」という教育目標のもと、「問題解決能力を育てる」教育の集大成として卒業研究を位置づけ、4年次学生に指導している。他大学の卒業研究のあり方についての報告は少ないが、稲垣ら<sup>1)</sup>は「学生にとっての大学での卒業研究の経験が、卒業後、実践の場における積極的な看護研究の遂行、ひいては科学的根拠に基づいた看護実践に結びついてくれることを期待する」と述べるなど、学生にとっての卒業研究の位置づけは概ね変わらないと思われる。また、質の高い看護職者を育成するために取得免許を看護師のみとした大学では<sup>2)</sup>、研究の基礎力を有する看護師を輩出することに重点を置くことから卒業論文を必須とするなど、卒業研究を行う経験がひいては看護職者としての質の保証にも繋がると考えられる。

看護学生の卒業研究について先行研究をみると、研究の初学者としての学生が辿る課題探求プロセスを明らかにしたもの<sup>3)</sup>、その途中で感じる困難や学び<sup>4)</sup>を明らかにしたもの、教員の関わりに焦点をあてたもの<sup>5)</sup>など、論文作成過程における学生・教員双方に焦点をあてたものがいくつかみられる。一方、研究テーマや内容の傾向を明らかにしたものについては、教員が自らの専門領域の卒業論文について分析したものがほとんどであり<sup>6-9)</sup>、大学の教育評価という全体的視点でまとめられたものや論文の質にまで言及したものはなく、研究の実態として資料となるものはほとんどみられない。

そこで著者らは平成19年に、鳥根大学医学部看護学科の第1-5期の看護学科卒業研究論文341件について、その研究内容を明らかにし、以降の教育に生かす目的で、研究テーマや研究方法、論文の記載方法などについて分析を行った<sup>10)</sup>。その結果、教員は専門以外の分野についても指導を行っており、学生の興味を優先させて学習意欲を継続させようとしていることが伺えたこと、倫理的配慮の記述の有無に経年的な変化が見られ、この5年の間に看護界への倫理意識の浸透と共に、論文中への記載数も増えてきていたこと、対象数や分析手法について記載に不備があるものがみられたことから、今後は論文の質を高める指導が必要であることが明らかになった。

5期生の卒業からさらに5年を経て10期生を送り出した現在、指導の状況や論文の質がどのように変化したかなどについて再度の分析を行うことによって、この5年間の教育の過程を評価し、今後活かしたいと考える。

## II. 本看護学科における「卒業研究」のプログラム

本学科の卒業研究の位置づけおよび教育目標は前述した通りであり、開学以来変わっていない。卒業研究に取り組むまでに学生は、1年次の情報処理演習によってコンピュータ操作や統計処理を学び、3年次の「看護研究方法論」で文献検索およびクリティーク、デモデータを用いた解析と論文の一部作成といった一連の研究手法を学び、準備を重ねている。

4年次の進め方については年度によって微細な変更がある他、1-5期と6-10期では担当教員の決定に関して大きな変更点があった。その点を含めて、具体的に以下に記す。

### 1. 担当教員の決定

学生は3年次の3月に、仮テーマおよび研究の概要を2件記入した担当講座希望表を提出する。卒業研究担当の基礎看護学講座が、研究の概要および教員の専門分野を考慮し、講師以上の教員一人あたりに学生3-5人ずつの分担を決定する。この担当は担任制度と併用しており、各教員は、担当学生について研究指導だけでなく総合実習・就職活動・国家試験対策などの個別指導も行う。また5期までと異なり、助教のFaculty Developmentも兼ねて各教授に1人の助教がつき、一緒に研究指導を行う体制がとられるようになり、10期からは卒業研究集録集の指導教員の欄に助教の氏名も併記されるようになった。

### 2. 研究の進め方

4年次の4月に指導教員が発表された後は、各教員の指導のもとに、11月末の発表会および12月初旬の集録の原稿提出を目標に進めていく。

### 3. 研究発表会

11月末に、4年次の全学生が卒業研究の成果について発表を行う。発表前にはプログラムと、400字の抄録からなる抄録集を作成する。発表会は学内2会場に分かれて学会形式で行い、指導教員が努める座長のもとで、学生一人あたり10分間のパワーポイントによるプレゼンテーションおよび質疑応答を行う。

### 4. 集録集作成

発表会での議論を経て、学生は研究成果をA4版2ページ(3200字前後)にまとめる。発表会の約1週間後に提出される全学生の原稿をまとめて「卒業研究集録」を作成する。

## 5. 評価

研究の過程、発表内容や状況、集録原稿などから、指導教員が総合的に評価する。

## III. 研究方法

### 1. 対象

第6～10回（平成19～23年度）卒業研究集録に集録されている全論文。

### 2. 調査・分析期間

平成25年4月～7月

### 3. データ収集方法

前調査と同様に、研究集録より抽出する内容は、卒業期、研究テーマ、担当教員研究分野、研究分野、研究デザイン、サンプリングの種類、研究対象および対象数、データ収集方法、データ分析方法、図表の有無（記載場所を含む）、倫理的配慮についての記述の有無の12項目とした。研究テーマは文字データとして、その他はカテゴリデータとして抽出した。

### 4. データ分類方法

抽出したデータは、研究者5名によりカテゴリ分けの妥当性について検討を行った。研究分野のカテゴリ作成にあたっては、前調査において日本看護科学学会の第25回学術集会プログラム<sup>11)</sup>の演題の24分類を参考に、実際のデータ20例程度と照らし合わせながら作成したカテゴリを使用した。サンプリングの種類、データ収集方法、データ分析方法も同様に、看護研究の参考書<sup>12-13)</sup>を参考にした前調査のカテゴリを使用した。研究デザインについては、研究目的との関連で示された枠組み<sup>14)</sup>を使用した。いずれにおいても、分析を進める上で該当するカテゴリがなかった場合は新しいカテゴリを追加した。各項目別カテゴリの分類基準はそれぞれ以下の通りである。

1) 研究分野：カテゴリに分類する際には、単にテーマや対象によって分類するのではなく、論文全体の内容をよく読み、内容を重視した。例えば、母性・小児・精神看護に関することであっても、看護教育に焦点化された内容は「看護教育」に分類し、家族に焦点化された内容は「家族看護」に分類した。また、臓器移植に関するテーマであっても、その内容によっては「看護倫理」に分類した。

2) 研究デザイン：研究目的との関連で示された枠組み<sup>14)</sup>に従い、仮説をたてずに“これは何であるか”を記述する目的の研究を「質的記述研究デザイン」、仮説をたてずに“何が起きているか”を探索する目的の研究を「量的記述研究デザイン」、仮説をたてて“関係があるだろうか”どうかを説明する目的の研究を「仮説検証型研究デザイン」、仮説をたてて“原因となっているだろうか”どうかを予測する目的の研究を「因果関係検証型研究デザイン」、二つのデザインを組み合わせで書かれた研究を「その他」とした。

3) サンプリングの種類：対象の抽出方法として、無作為か有為かを分類した。

4) データ収集方法：どのような方法を用いてデータを収集しているかという視点で、「面接」「観察」「実験」「質問紙調査」「文献調査」「その他」の6つに分類した。複数の方法でデータを収集している研究もみられたため、用いられている方法すべてを抽出した。

5) 対象：「患者・クライアント」には、入院中の患者だけでなく、外来患者や地域の施設の入所者などを含めた。対象が「患者と家族」など複数の研究については、組み合わせのパターンが多かったため、すべて「その他」に含めた。「正常な妊婦・褥婦」は、看護職の介入を必要とする対象であるため、新たに分類の中に挙げた。

6) 対象数：質問紙調査法の場合は、有効回答数とした。

7) データ分析方法：量的なデータの分析については、方法に記述されている統計的手法および図表より読み取り可能な統計的手法を抽出し、統計学の文献<sup>5)</sup>に示されている統計学的アプローチの方法の順にそって、扱っている変数の数別にカテゴリ化した。質的なデータの分析については、具体的な分析方法が記述されていれば、そのまま抽出した。具体的な分析方法の記述がないもののうち、面接記録等から抽出した内容をコード化した上で、カテゴリ化をすすめ、抽象度をあげているものは「内容分析」とした<sup>16)</sup>。内容分析と同様にコード化した後、カテゴリ化になんらかの枠組みを使用しているものは「その他」に含めた。

8) 図表の有無・記載場所：図表の有無を抽出し、記載場所については「はじめに」「方法」「結果」「考察」「まとめ」のどの部分に記載されているかを抽出した。

9) 倫理的配慮の記述の有無：具体的な内容は問わず、配慮したこと一言でも触れていれば「あり」とし、全く触れていないものを「なし」とした。

## 5. データ解析方法

1) 各項目のカテゴリ別度数および割合により全体および各期の傾向を把握した。分析には『IBM SPSS21』を用い、図表の有無および倫理的配慮の記述の有無については期別の比較に $\chi^2$ 検定を行い、有意確率を5%とした。

2) 論文にはキーワードが記載されていないため、研究内容の傾向をつかむために、論文内容が端的に表されていると考えられる研究テーマを用いて形態素解析を行い、使用されている語の頻度について検討を行った。「形態素とは語の不定形、および、語より小さい単位で意味をもつ最小の単位」<sup>17)</sup>であり、「語を、それを構成する形態素に分離する処理が形態素解析」<sup>17)</sup>である。形態素解析を含めたテキストマイニングには『KH Coder』<sup>18)</sup>を用いた。具体的な手順は以下の通りである。

- (1) 全件すべての研究テーマを用いて形態素解析を行い、抽出された語を品詞別に分類する。
- (2) (1)のうち名詞については、度数が5以上の語によって、類似のものをまとめてカテゴリ化を行う。
- (3) 出現パターンの似通った語にどのようなものがあったのかを探るため、品詞を問わず出現頻度が10をこえる語を用いて対応分析を行う。

3) 1), 2)の分析について、1-5期の前調査の結果と比較を行った。

## 6. 倫理的配慮

学生氏名や学籍番号など個人情報となるデータの収集は控え、データはすべて集団として扱い、統計処理を行った。

# IV. 結 果

## 1. 研究分野

学生が行った研究の分野は、その他を含めて24分野に分類された(表1)。最も多かったのは、「在宅看護」40件(11.8%)であり、次いで「看護教育」39件(11.5%)、「学校保健」31件(9.1%)、「家族看護」29件(8.6%)、「高齢者看護」24件(7.1%)と続いていた。期別の傾向は見出されなかった。なお、「その他」は、看護全般に

関わるテーマが2件、チーム医療に関するテーマが2件であった。1-5期の調査<sup>3)</sup>と比べ、本調査で新たに加わった分野は「歴史」1件、「看護倫理」7件、「リスキーマネジメント」3件、「クリティカルケア」1件、「地域高齢者看護」10件、「国際看護」2件、「学校保健」31件であった。

教員の研究分野別にみた学生の研究分野では、基礎看護学の教員は「クリティカルケア」を除く全ての分野の研究指導を行っていた(表2)。臨床医学の教員は「慢性期看護」5件・「周手術期看護」4件・「母性看護」4件の順で多かった。成人看護学の教員は「慢性期看護」10件・「がん看護」6件・「周手術期看護」6件、母性看護学の教員は「母性看護」14件・「看護教育」4件、小児看護学の教員は「家族看護」15件・「小児看護」6件、精神看護学の教員は「精神看護」10件・「看護管理」3件の順で多かった。また、老年看護学の教員は「在宅看護」23件・「高齢者看護」17件、地域看護学の教員は「学校保健」23件・「在宅看護」9件の順で多かった。基礎看護学、臨床医学の教員を除いては、それぞれの教員の領域に特化した内容が多かった。

10期の集録集には、教授とペアで指導について助教の氏名が併記されていることから、教授と助教の研究分野の組合せについても詳しく見てみた。その結果、基礎・母性・地域看護学を専門とする助教は、同じ領域の教授と共に指導を行っていたため、教員(講師・准教授・教授)の研究分野と学生の研究分野の結果と同様の傾向が見られ、基礎看護学の助教は教授同様に様々な領域の研究指導を行い、母性・地域看護学の助教は自分の研究領域に特化した研究領域の指導が多かった。

一方、成人・小児・精神看護学の助教は他領域の教授と共に指導を行っていたため、自分の研究領域には関わらず、様々な領域の研究指導を行っていた。特に、成人看護学(慢性期看護)・小児看護学の助教は、自分の研究領域に関する研究指導の件数は0件であった。

## 2. 研究デザイン

研究デザインで最も多かったのは「質的記述的研究」195件(57.5%)であり、全体の半数以上を占めていた(表3)。次いで多いのは「仮説検証型研究」であった。1-5期の結果と比べると、「質的記述的研究」の占める割合は微増(53.3%から57.5%)、「仮説検証型研究」は10.8%から17.1%と増えていた。逆に「量的記述的研究」の占める割合は全体で21.9%から13.9%に、「因果関係検証型研究」も7.6%から4.7%と減少傾向であった。

表1 期別学生の研究分野

講座	学生の研究分野																	合計							
	歴史	看護技術	看護倫理	看護教育	看護管理	リスクマネジメント	感染看護	周手術期看護	クリティカルケア	がん看護	ターミナルケア	慢性期看護	母性看護	小児看護	精神看護	高齢者看護	リハビリテーション看護		在宅看護	地域看護	地域高齢者看護	家族看護	国際看護	学校保健	その他
6期	1	1	2	10	2	0	3	3	0	0	4	6	3	3	2	3	1	8	0	1	6	1	2	1	63
7期	0	3	1	6	4	2	3	2	0	3	0	2	2	2	2	5	0	11	2	2	6	0	5	1	64
8期	0	2	0	9	6	1	1	2	1	3	4	3	7	1	3	5	1	4	4	3	6	0	8	0	74
9期	0	3	2	6	4	0	0	2	0	4	1	4	6	1	2	7	0	13	1	1	7	0	7	2	73
10期	0	2	2	8	3	0	1	4	0	1	1	6	3	1	3	4	1	4	4	3	4	1	9	0	65
合計	1	11	7	39	19	3	8	13	1	11	10	21	21	8	12	24	3	40	11	10	29	2	31	4	339
	(0.3%)	(3.2%)	(2.1%)	(11.5%)	(5.6%)	(0.9%)	(2.4%)	(3.8%)	(0.3%)	(3.2%)	(2.9%)	(6.2%)	(6.2%)	(2.4%)	(3.5%)	(7.1%)	(0.9%)	(11.8%)	(3.2%)	(2.9%)	(8.6%)	(0.6%)	(9.1%)	(1.2%)	(100%)

表2 教員専門分野と学生の研究分野

講座	教員専門分野	学生の研究分野																	指導した学生の研究分野数								
		歴史	看護技術	看護倫理	看護教育	看護管理	リスクマネジメント	感染看護	周手術期看護	クリティカルケア	がん看護	ターミナルケア	慢性期看護	母性看護	小児看護	精神看護	高齢者看護	リハビリテーション看護		在宅看護	地域看護	地域高齢者看護	家族看護	国際看護	学校保健	その他	合計
基礎	基礎看護学	1	6	4	25	12	2	0	3	0	2	3	2	0	0	1	2	1	4	3	1	4	1	2	0	82	20
基礎	基礎看護学(医)	0	3	0	2	1	0	8	0	0	1	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	1	1	0	21	9
臨床	臨床(医)	0	0	1	1	0	0	4	0	1	0	5	4	0	0	1	0	2	1	1	0	2	0	1	2	26	13
臨床	成人看護学	0	1	1	2	1	0	6	1	6	4	10	0	0	0	1	0	1	1	2	0	1	0	1	2	40	15
臨床	母性看護学	0	0	0	4	2	0	0	0	0	0	0	14	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	23	5
臨床	小児看護学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	15	0	0	0	0	21	2
臨床	精神看護学	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	10	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0	21	7
地域	老年看護学	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	17	0	23	2	8	3	0	1	0	57	8	
地域	地域看護学	0	0	0	3	0	1	0	0	1	3	1	1	0	0	0	0	9	3	1	2	0	23	0	48	11	
合計	合計	1	11	7	39	19	3	8	13	1	11	10	21	8	12	24	3	40	11	10	29	2	31	4	339		

表3 期別研究デザイン

		研究デザイン					合計
		質的記述研究	量的記述研究	仮説検証型研究	因果関係検証型研究	その他	
期	6	29 (46.0%)	12 (19.0%)	15 (23.8%)	5 (7.9%)	2 (3.2%)	63 (100%)
	7	35 (54.7%)	9 (14.1%)	13 (20.3%)	5 (7.8%)	2 (3.1%)	64 (100%)
	8	37 (50.0%)	7 (9.5%)	18 (24.3%)	3 (4.1%)	9 (12.2%)	74 (100%)
	9	52 (71.2%)	6 (8.2%)	7 (9.6%)	2 (2.7%)	6 (8.2%)	73 (100%)
	10	42 (64.6%)	13 (20.0%)	5 (7.7%)	1 (1.5%)	4 (6.2%)	65 (100%)
合計		195 (57.5%)	47 (13.9%)	58 (17.1%)	16 (4.7%)	23 (6.8%)	339 (100%)

## 3. サンプリングの種類

「無作為抽出」は見られなかった。

## 4. 研究対象

研究対象は「看護職者」が最も多く、いずれの期も20～30%を占めていた(表4)。次いで多かったのは、「患者」であった。研究対象と卒業期との間には有意な関連はみられなかった。また、「その他」では、医療者だけでなく、家族を含めた在宅で関わる多くの職種を対象に調査を行ったものや子育てサポーターなどがあつた。1～5期と比べると、全体では「看護職者」(12%→27.7%)と「患者家族・遺族」(7.9%→14.7%)が増え、「患者」が減っていた(28.4%→18.9%)。

## 5. 対象数

対象数は研究デザインに影響されると考えられるため、期別研究デザイン別に記述統計値を算出した(表5)。「質的記述研究」では、6期および10期の最大対象数が39、8期の最大対象数が64と多かったが、この

3件はいずれも文献研究であつた。「量的記述研究」では、9期の最小値が1であつたが、これは一人の対象に対して様々な尺度を用いてサンプルを収集していたためである。対象数の平均はすべての期において「仮説検証型研究」が最も多かった。なお、すべての論文において対象数は記述されており、不備はなかった。

## 6. データ収集方法

8期を除くすべて期で最も多かったのは、面接法であり、次いで質問紙法であつた(表6)。8期のみ質問紙法が最も多く(51.4%)、次いで面接法(41.9%)であつた。その他の方法論は少数であるが、概ね各期にみられた。

## 7. データ分析方法

量的分析では、記述統計値の中の度数や割合を提示しているものが最も多く、全体の約3割を占めており、各期においては約25～30%で見られた(表7)。2変量の分析は、全体では、多い順から「 $\chi^2$ 検定」、「t検定」の順であつた。「マンホイットニーのU検定」や「ウィルコクソンの順位和検定」などのノンパラメトリック検定は、8期～10期において見られていた。分散分析は、少数だがほぼ毎期見られており、多変量解析では、8期において因子分析が1件のみ見られていた。また、結果で有意差の有無について記述があるものの、検定方法については、方法にも結果にも記載が無いものが2件見られた。

質的分析では、「内容分析」によってカテゴリを提示する質的帰納的分析が全体の16%を占めており、各期においては約10～20%で見られた。「その他」には、1～3事例を丁寧にまとめているものがほとんどで

表4 期別研究対象

		研究対象										合計
		患者	患者家族・遺族	健康な成人・老人	正常な妊婦・褥婦	看護学生	他学部学生・生徒・児童	看護職者	文献	外国人	その他(複数対象含む)	
期	6	15 (23.8%)	9 (14.3%)	2 (3.2%)	0 (0%)	14 (22.2%)	0 (0%)	14 (22.2%)	3 (4.8%)	1 (1.6%)	5 (7.9%)	63 (100%)
	7	14 (21.9%)	9 (14.1%)	2 (3.1%)	0 (0%)	9 (14.1%)	2 (3.1%)	20 (31.3%)	2 (3.1%)	0 (0%)	6 (9.4%)	64 (100%)
	8	9 (12.2%)	7 (9.5%)	7 (9.5%)	4 (5.4%)	11 (14.9%)	6 (8.1%)	23 (31.1%)	1 (1.4%)	0 (0%)	6 (8.1%)	74 (100%)
	9	15 (20.5%)	18 (24.7%)	2 (2.7%)	3 (4.1%)	6 (8.2%)	1 (1.4%)	16 (21.9%)	3 (4.1%)	0 (0%)	9 (12.3%)	73 (100%)
	10	11 (16.9%)	7 (10.8%)	2 (3.1%)	2 (3.1%)	10 (15.4%)	1 (1.5%)	21 (32.3%)	2 (3.1%)	1 (1.5%)	8 (12.3%)	65 (100%)
合計		64 (18.9%)	50 (14.7%)	15 (4.4%)	9 (2.7%)	50 (14.7%)	10 (2.9%)	94 (27.7%)	11 (3.2%)	2 (0.6%)	34 (10.0%)	339 (100%)

$\chi^2$ 値=44.484  
P=0.157

あった。

1-5期と比較すると、質的分析は年度によって多少の偏りはあるものの、全体的な割合は変わりなかった。量的分析では、多変量解析が1-5期は全部で6

例ほどみられていたが、6-10期では因子分析の1例のみに減っていた。また、ノンパラメトリックな検定方法が1-2件であったのが、8期からは10件近くに増えていた。

表5 期別研究デザイン別対象数

	研究デザイン	件数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
6~10期	質的記述研究	195	5.0	7.1	1	64
	量的記述研究	48	73.4	55.9	1	237
	仮説検証型研究	58	114.4	84.2	13	374
	因果関係検証型研究	15	9.7	8.1	1	30
	その他	23	61.3	63.2	2	193
	合計	339	37.4	61.7	1	374
6期	質的記述研究	30	4.8	7.3	1	39
	量的記述研究	13	56.8	39.1	3	138
	仮説検証型研究	14	89.0	60.2	27	216
	因果関係検証型研究	4	10.5	9.9	4	25
	その他	2	13.0	4.2	10	16
	合計	63	34.9	48.4	1	216
7期	質的記述研究	35	4.3	3.7	1	21
	量的記述研究	9	54.6	47.0	21	155
	仮説検証型研究	13	108.5	83.6	37	310
	因果関係検証型研究	5	4.6	2.7	1	8
	その他	2	8.0	8.5	2	14
	合計	64	32.7	58.4	1	310
8期	質的記述研究	36	7.2	12.2	1	64
	量的記述研究	7	97.0	84.0	26	237
	仮説検証型研究	19	129.3	95.2	33	374
	因果関係検証型研究	3	16.3	11.8	9	30
	その他	9	68.3	62.1	4	159
	合計	74	54.9	78.3	1	374
9期	質的記述研究	52	4.3	3.4	1	22
	量的記述研究	6	67.7	67.3	1	192
	仮説検証型研究	7	129.9	92.1	34	304
	因果関係検証型研究	2	8.0	2.8	6	10
	その他	6	86.7	69.9	28	193
	合計	73	28.4	56.7	1	304
10期	質的記述研究	42	4.7	6.3	1	39
	量的記述研究	13	93.1	50.0	25	188
	仮説検証型研究	5	123.0	104.3	13	258
	因果関係検証型研究	1	15.0	.	15	15
	その他	4	58.3	76.9	2	170
	合計	65	34.9	58.2	1	258

表6 期別データ収集方法

	データ収集方法							合計	
	面接法	観察法	実験法	テスト法 (既存の スケール 含む)	質問紙調 査法	文献調査 法	その他		
期	6	30 (47.6%)	1 (1.6%)	6 (9.5%)	6 (9.5%)	25 (39.7%)	3 (4.8%)	0 (0%)	63 (100%)
	7	34 (53.1%)	0 (0%)	8 (12.5%)	8 (12.5%)	19 (29.7%)	2 (3.1%)	0 (0%)	64 (100%)
	8	31 (41.9%)	3 (4.1%)	4 (5.4%)	9 (12.2%)	38 (51.4%)	1 (1.4%)	0 (0%)	74 (100%)
	9	49 (67.1%)	1 (1.4%)	3 (4.1%)	6 (8.2%)	19 (26.0%)	3 (4.1%)	1 (1.4%)	73 (100%)
	10	40 (61.5%)	1 (1.5%)	3 (4.6%)	4 (6.2%)	21 (32.3%)	2 (3.1%)	0 (0%)	65 (100%)
合計	184 (54.3%)	6 (1.8%)	24 (7.1%)	33 (9.7%)	122 (36.0%)	11 (3.2%)	1 (0.3%)	339 (100%)	

表7 期別データ分析方法

		データ分析方法(1論文より複数抽出)														合計
		量的データの分析											質的データの分析			
		1変量			2変量				3変量	多変量間		内容分析	その他の質的分析			
		度数や割合	代表値	散布度	スピアマン相関係数	ピアソン相関係数	$\chi^2$ 検定	t検定	マンホイットニーU検定	ウィルコクソン順位和検定	分散分析他*			重回帰分析	因子分析	
期	6	33 (31.4%)	16 (15.2%)	4 (3.8%)	1 (1.0%)	0 (0%)	9 (8.6%)	8 (7.6%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (2.9%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (8.6%)	22 (21%)	105 (100%)
	7	33 (31.1%)	12 (11.3%)	5 (4.7%)	2 (1.9%)	0 (0%)	6 (5.7%)	9 (8.5%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (1%)	0 (0%)	0 (0%)	14 (13.2%)	24 (22.6%)	106 (100%)
	8	47 (30.9%)	19 (12.5%)	12 (7.9%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)	14 (9.2%)	4 (2.6%)	9 (5.9%)	4 (2.6%)	2 (1.3%)	0 (0%)	1 (0.7%)	20 (13.2%)	18 (11.8%)	152 (100%)
	9	36 (23%)	25 (16%)	15 (9.7%)	3 (1.9%)	0 (0%)	6 (3.9%)	1 (0.6%)	7 (4.5%)	1 (0.6%)	2 (1.3%)	0 (0%)	0 (0%)	32 (21%)	26 (17%)	154 (100%)
	10	30 (25.2%)	18 (15.1%)	9 (7.6%)	0 (0%)	0 (0%)	12 (10.1%)	3 (2.5%)	3 (2.5%)	2 (1.7%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	26 (21.8%)	16 (13.4%)	119 (100%)
合計		179 (28.1%)	90 (14.2%)	45 (7.1%)	7 (1.1%)	1 (0.2%)	47 (7.4%)	25 (3.9%)	19 (3.0%)	7 (1.1%)	0 (0%)	1 (0.2%)	101 (15.9%)	106 (16.7%)	636 (100%)	

注)※分散分析他：多重比較法やノンパラメトリック検定としてクラスカルワリス検定を含む

表8 期別表の有無と表の場所

期	表の有無		表の場所			
	なし	あり	方法	結果	考察	方法・結果
6	23 (36.5%)	40 (63.5%)	4 (10.0%)	33 (82.5%)	1 (2.5%)	2 (5.0%)
7	27 (42.2%)	37 (57.8%)	2 (5.4%)	35 (94.6%)		
8	30 (40.5%)	44 (59.5%)	1 (2.3%)	40 (90.9%)		3 (6.8%)
9	17 (23.3%)	56 (76.7%)		56 (100%)		
10	24 (36.9%)	41 (63.1%)		41 (100%)		
合計	121 (35.7%)	218 (64.3%)	7 (3.2%)	205 (94.0%)	1 (0.5%)	5 (2.3%)

表9 期別図の有無と図の場所

期	図の有無		図の場所				
	なし	あり	方法	結果	考察	まとめ	結果・考察
6	37 (58.7%)	26 (41.3%)	1 (3.8%)	14 (53.8%)	6 (23.1%)	1 (3.8%)	4 (15.4%)
7	38 (59.4%)	26 (40.6%)	1 (3.8%)	17 (65.4%)	5 (19.2%)	2 (7.7%)	1 (3.8%)
8	34 (45.9%)	40 (54.1%)		30 (75.0%)	7 (17.5%)	2 (5.0%)	1 (2.5%)
9	50 (68.5%)	23 (31.5%)	1 (4.3%)	12 (52.2%)	7 (30.4%)	3 (13.0%)	
10	46 (70.8%)	19 (29.2%)		11 (57.9%)	7 (36.8%)		1 (5.3%)
合計	205 (60.5%)	134 (39.5%)	3 (2.2%)	84 (62.7%)	32 (23.9%)	8 (6.0%)	7 (5.2%)

表10 研究デザイン別表の有無と表の場所

研究デザイン	表の有無		表の場所			
	なし	あり	方法	結果	考察	方法・結果
質的記述研究	56 (28.7%)	139 (71.3%)	3 (2.2%)	134 (96.4%)		2 (1.4%)
量的記述研究	27 (57.4%)	20 (42.6%)	1 (5.0%)	18 (90.0%)		1 (5.0%)
仮説検証型研究	26 (44.8%)	32 (55.2%)		30 (93.8%)		2 (6.3%)
因果関係検証型研究	6 (37.5%)	10 (62.5%)	3 (30.0%)	6 (60.0%)		1 (10.0%)
その他(複合型含む)	6 (26.1%)	17 (73.9%)		17 (100%)		
合計	121 (35.7%)	218 (64.3%)	7 (3.2%)	205 (94.0%)	1 (0.5%)	5 (2.3%)

8. 図表の有無

期別にみると、表はどの期も60～70%の学生が用いており、その殆どは結果の説明に使用されていた(表8)。図は表より少なく30～50%の学生が用いており、そのうち50～70%は結果の説明に、20～30%は考察で使用されていた(表9)。

研究デザイン別にみると、表はいずれの研究デザインにおいても、殆どが結果の説明に使用されていた(表10)。一方、図は、「質的記述的研究」においては考察で使用されることが最も多く、約60%を占めていた(表11)。その他の研究デザインでは、表と同様にほとんどが結果の説明に用いられていた。しかし本来図表が用いられる場所ではないと思われる「まとめ」や量的研究における「考察」において図表が用いられているケースがみられた。「まとめ」に図を掲載していた8件については、結果・考察で得られたことを「まとめ」に図

表11 研究デザイン別図の有無と図の場所

研究デザイン	図の有無		図の場所				
	なし	あり	方法	結果	考察	まとめ	結果・考察
質的記述研究	143 (73.3%)	52 (26.7%)		16 (30.8%)	29 (55.8%)	6 (11.5%)	1 (1.9%)
量的記述研究	17 (36.2%)	30 (63.8%)	1 (3.3%)	24 (80.0%)	1 (3.3%)	1 (3.3%)	3 (10.0%)
仮説検証型研究	30 (51.7%)	28 (48.3%)		26 (92.9%)	1 (3.6%)		1 (3.6%)
因果関係検証型研究	5 (31.3%)	11 (68.8%)	1 (9.1%)	7 (63.6%)	1 (9.1%)	1 (9.1%)	1 (9.1%)
その他(複合型含む)	10 (43.5%)	13 (56.5%)	1 (7.7%)	11 (84.6%)			1 (7.7%)
合計	205 (60.5%)	134 (39.5%)	3 (2.2%)	84 (62.7%)	32 (23.9%)	8 (6.0%)	7 (5.2%)



示しており、中にはその図についての説明が本文中のどこにもみられないケースもあった。

9. 倫理的配慮の記述の有無

対象者のいない実験研究や文献研究など、倫理的配慮が不要な研究もあるため、対象が「文献」または「その他」の中で倫理的配慮の必要のない研究を除いた数を母数として期別の記述数を表にした(表12)。7期から10期において記載なしの研究は3%以下であった。

6期は約7%が倫理的配慮について記載していなかったが、7期から10期は97%以上が記載していた。倫理的配慮の記載の有無と卒業期には、有意な関係は見られなかった。

表12 期別倫理的配慮の記述の有無

	倫理的配慮の記述		合計	
	なし	あり		
期	6	4 (6.9%)	54 (93.1%)	58 (100%)
	7	0 (0%)	62 (100%)	62 (100%)
	8	1 (1.4%)	72 (98.6%)	73 (100%)
	9	2 (2.9%)	68 (97.1%)	70 (100%)
	10	0 (0%)	63 (100%)	63 (100%)
合計	7 (2.1%)	319 (97.9%)	326 (100%)	$\chi^2=9.347$ $P=0.053$

10. 研究テーマ

研究テーマの形態素解析の結果から、抽出された名詞のカテゴリ別度数(頻度が5以上のみ掲載)を表13にまとめた。カテゴリ別に分類した結果、対象者に関する語が218件と最も多く、次いで研究や手法に関する語が206件と多かった。

抽出頻度が10以上の語を用いて対応分析を行った結果(図1)、卒業研究のテーマについて、対象者別に関連する用語が異なり、よく行われる研究について一定の傾向がみられた。看護学生を対象とした研究では、何らかの「関連」を明らかにしようとする傾向がみられた。また看護職者を対象としたものでは、養護教諭は「支援」について、看護師はケアに対する「影響」や「要因」について、また看護師自身の「意識」や「認識」についても取りあげていた。ケア対象者を中心にと、患者については「関わり」について、認知症高齢

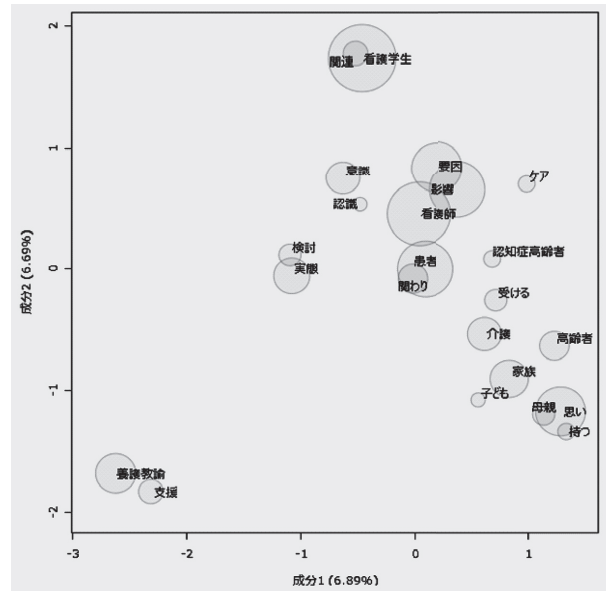


図1 出現頻度の高い名詞の対応分析の結果

表13 研究テーマにおける名詞のカテゴリ別頻度

対象者		対象者の状況や場に関する語		研究自体や手法に関する語	
看護学生	37	生活	9	影響	30
看護師	35	保健室	7	要因	27
患者	30	自宅	6	実態	19
養護教諭	21	化学療法	6	関わり	16
家族	20	在宅療養	6	関連	14
高齢者	16	在宅	6	検討	13
母親	13	入院中	5	効果	9
認知症高齢者	11	造設	5	役割	9
子ども	10			体験	9
精神科看護師	8			文献研究	9
新卒看護師	6			関係	8
訪問看護師	6			対処	8
学生	5			影響要因	8
計	218	計	50	研究	6
対象者の内面に関する語		援助形態に関する語		意識調査	
思い	26	介護	18	プロセス	5
意識	18	支援	14	課題	5
認識	10	ケア	11	対処行動	5
困難	9	看護	8		
変化	7	継続	5		
イメージ	6				
計	76	計	56	計	206

者および高齢者は「介護」を「受ける」ことについて、子供と母親についてはどんな「思い」を「持つ」のかについて焦点があたっていた。また、家族は高齢者とも子供とも近く、家族看護の視点も少なくないことが伺えた。他に「検討」や「実態」といった用語があがっており、対象者に関わらない実態調査も多くなされている傾向がみられた。

## V. 考 察

### 1. 研究テーマ・研究デザインの選択

学生が行った研究分野は24分野と、様々な領域の研究が行われていた。1-5期の調査<sup>10)</sup>ではなかった「学校保健」の分野が挙げたのは、カリキュラムの改正により、養護教諭1種免許状の取得が可能となったためである。教員の研究分野別にみた学生の研究分野については、基礎看護学の教員と臨床医学の教員が、特定の領域に偏らずに様々な分野の研究指導を行っていた。教員が学生の興味を優先させ、自分の専門外の研究テーマについても幅広く指導にあたる姿勢は、1-5期から教員が入れ替わっていても、継続されていた。

本学で教員の専門外のテーマの指導が増える原因として、学生の希望が集中する分野の存在が挙げられる。例えば臨床実習が終わったばかりの時期に希望をとるため、実習中に感じた疑問をテーマとして挙げる学生も多く、専門教員の少ない小児看護学・精神看護学等はすぐに定員を超える。また養護教諭を目指し、卒業研究で「学校保健」をテーマとする学生は毎年必ず5名以上おり、こちらも専門教員1名では対応に限界がある。

中村らは<sup>3)</sup>、学生の課題探求の動機の1つには積極的な「望み通りの研究課題の希求」があり、「自分の関心のあることを研究課題として研究しようという意志や考えを強く抱く」ことを明らかにしている。行動につながるためには動機付けが必要であり、学生のこのような積極的な動機は大切に育てて研究活動の推進力につなげていく必要がある。よって学生の興味関心を優先させた指導や必要不可欠である。この指導を行う教員の存在意味として同じく中村ら<sup>3)</sup>は、「水先案内人として学生の視野を広げたり、見逃していることを気づかせてくれたり、研究についてのヒントを与えて正しい方向に自分を導いてくれる存在である」、としている。そこで研究の方法論ということだけでなくさらに視野が広がり多くのヒントがもらえるように、専門分野の教員の援助を受けられるような仕組み作りも必要だと思われる。

この専門外の研究指導については、教授とペアになっ

た助教に、専門性を補完する役割が期待される。10期以前にも臨床医学の教員には助教がつき、看護の専門分野の指導についてサポートを行ってきていた。よって今後、分野の異なる教員がペアとなることで、より多くの研究分野に対応できることが期待される。更に平成25年度入学生から助産師免許の取得が可能となり、「母性看護学」の領域の増加が予測される。ペアとなる教員同士の連携、教員個々での連携を図るのみならず、今後は看護学科全体での連携構築も視野に入れる必要がある。

### 2. 研究方法

対象者の中で「看護職者」の割合が増加していた。この「看護職者」が附属病院の看護師とは限らないが、平成17年度（4期生）から、附属病院看護部と看護学科が卒業研究について正式に取り決めを行っており、この方法が定着したことで調査が行いやすくなったことも一因と考えられる。

デザインとしては、質的・仮説検証が増え因果関係検証型の研究が少なくなっていた。これは、卒業研究というかなり時間も資源も限られた中で、学生の興味・疑問を突き詰めるまでにかなりの時間がかかることを考えると、因果関係検証型の研究をするのは難しく、妥当な変化と思われる。

データ分析方法において8期からノンパラメトリックな検定方法が増えていたが、これはこの期の学生の入学時から、1年次の統計学入門でノンパラメトリック検定を重点的に教えたことと対応しており、卒業研究においてそれまでに積み上げた学習内容がしっかりと活用されていることの1つの現れと考える。

### 3. 論文作成

倫理的配慮の記述の有無については、1-5期ではまだ不十分であったが、6-10期のほとんどの研究で倫理的配慮の重要性が認識され、記載が定着している。また1-5期では対象数や分析方法等の記載不備もみられたが、6-10期ではみられなかったことから、論文の質が一定程度保たれるようになってきたと考えられる。

ただし、一部の学生は、「まとめ」に図を掲載するなど、不適切な用い方をしていた。本来「まとめ」は目的、結果の要約を踏まえた最終的な主張を記載するものであり、それまでに述べていない新たな情報を書き加えるべきではない。「まとめ」に図を用いることは、新たな情報を加えることであり、改善が必要である。また、図表作成時のガイドライン<sup>19)</sup>では、「図1は…を示す」「…(図1参照)」などと、本文の中で図表について言及する必要があるとされているが、これらの記載が

ないものもあった。図表を用いる学生が増えたことは良い傾向であると考えますが、適切な図表の用い方についての指導の必要性が示唆された。

#### 4. 研究の限界と今後の課題

大学組織では研究においては専門分野単位で取り組むことが多く、卒業研究についてもそれぞれ講座単位で指導にあたっている大学が多いと考えられる。実際学生の研究についての報告は、ほとんどが専門分野に限ったテーマや調査方法のトレンドに関する報告であり<sup>6-9)</sup>、本研究のように全学的なデータを扱って論文の内容に言及したものはみられない。そのかわり、先行研究ではテーマをさらに細かく分類して経年の傾向を詳しく調べており、学生の興味の変遷がとらえられている。よって今後は専門分野別のテーマ解析も行っていく必要がある。

また本研究では、集録集上のデータ分類に基づく分析のみであり、学生の満足度や達成度という視点が含まれていない。教育評価という点では、学生側の視点も含めて調査を行っていく必要があると考える。さらに、論文内容については記載状況の評価にとどまっておき、真に研究の質を評価するための、研究内容の妥当性の評価は行っていない。研究内容の妥当性を評価して次年度の指導につなげていくことは、教員の Faculty development にも繋がると考えられるため、卒業研究のクリティークを基にした研究手法に関する勉強会なども含めて検討していきたい。

## VI. 結 論

本学第6-10期の看護学科卒業研究論文339件を分析し1-5期の結果と比較したところ、以下の結果を得た。

1. 学生の研究分野は17分野から24分野に増えており、学生の興味範囲の広がりおよび養護教諭課程の設置の影響と考えられた。
2. 教員が入れ替わる中、自分の研究分野と異なるテーマについても、教員が学生の興味を尊重し研究のサポートを行う姿勢は変わっていなかった。
3. 教授と助教がペアになって指導を行うことで各々の専門性を補てんすることができ、学生の興味に幅広く対応できていた。
4. 倫理的配慮の記述はほぼ定着し、研究方法におけ

る必要な記述(対象数や統計手法)の不足もほとんど見られなかった。一部図表の用い方で不適切なものがみられ、論文作成の質を上げる努力は引き続き必要である。

5. 今後は、学生からの評価も含めた検討が必要である。

## VII. 引用文献

- 1) 稲垣 敦, 甲斐倫明, 市瀬孝道他: 看護学の基礎教育における卒業研究, 看護教育, 44 (11), 1002-1006, 2003.
- 2) 永田智子, 上別府圭子, 真田弘美: 科学者としての素養を身に付ける教育課程, 保健の科学, 54 (6), 369-373, 2012.
- 3) 中村郷子, 古瀬みどり: 看護系大学生の卒業研究における課題探求プロセス, 日本看護研究学会雑誌, 30 (1), 89-95, 2007.
- 4) 内海香子, 水野照美, 山本洋子他: 看護系 A 大学成人看護学領域での学生の卒業研究における困難と学び, 日本看護学教育学会誌, 19 (1), 71-78, 2009.
- 5) 齋藤貴子, 原田慶子: 看護学生の卒業研究指導における教員の関わりのある方, 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第7号, 61-67, 2002.
- 6) 遠藤明美, 谷田恵美子, 齋藤智恵他: 卒業研究からみる老年看護に関する研究の動向と看護大学生の関心, 岡山県看護教育研究会誌, 37 (1), 25-31, 2013.
- 7) 栗本一美, 金山時恵: 地域看護学領域における「卒業研究」の動向 過去9年間の看護研究集録集の分析より, インターナショナル Nursing Care Research, 8 (2), 79-87, 2009.
- 8) A 短期大学看護学科における卒業研究の動向 がん看護に視点をおいた分析から, 新見公立短期大学紀要, 29巻, 199-203, 2008.
- 9) 高屋順子, 山田洋子, 井出成美他: 卒業研究からみた地域看護学教育の実績, 千葉大学看護学部紀要, 22号, 51-55, 2000.
- 10) 津本優子, 福間美紀, 小林裕太: 看護学生の卒業研究論文の実態調査-過去5年間の研究内容分析-, 島根大学医学部紀要, 第30巻, 23-33, 2007.
- 11) 新道幸恵: 第25回日本看護科学学会学術集会プログラム, 12-13, 2007.
- 12) 石井京子, 田尾清子: ナースのための質問紙調査とデータ分析, 9-25, 医学書院, 2002.
- 13) 川口孝泰: 看護研究ガイドマップ, 19-95, 医学書院, 2002.

- 14) 黒田裕子：看護研究 step by step, 81, 学研, 2006.
- 15) 丹後俊郎, 宮原英夫編：医学統計学ハンドブック, v ~ xiii, 1995.
- 16) 黒田裕子：看護研究 step by step, 173, 学研, 2006.
- 17) 天野真家, 石崎俊他, 宇津呂武仁, 成田真澄, 福本淳一：IT Text 自然言語処理, 15, オーム社, 2007.
- 18) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-, 理論と方法, 数理社会学会, 19 (1) : 101-115, 2004.
- 19) グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著：よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして, 医歯薬出版株式会社, 2007.

(受付 2013年8月28日)